



いじめ問題を未然に防止するために

当センターでは「いじめ問題対策支援室」を併設しており、いじめに関する相談も受けております。それぞれの学校では、いじめ問題が発生しないよう平素から子どもたちの心の状況や交友関係に注視され、加えて、いじめアンケート等も実施され、早期発見、早期対応に努めておられます。

それでも、当センターへ寄せられるいじめ相談は決して少なくはありません。

いじめ問題は、いじめる子がいなければ発生しません。であれば、いじめ問題を未然に防ぐ最も効果的な方法は、学校でも家庭でも「いじめは相手の人権を侵害し、犯罪でもある」ということを繰り返し繰り返し指導し、いじめの加害者を出さないことであろうと考えます。

ところで、今から 10 年以上前にベストセラーとなった「国家の品格」で、著者の藤原正彦氏は、いじめに関して「卑怯（ひきょう）を教えよ」と、次のように述べています。

いじめに対して何をすべきか。カウンセラーを置く、などという対症療法より、武士道精神にのって「卑怯」を教えないといけない。「いじめが多いからカウンセラーを置きましょう」という単純な論理にくらべ、「いじめが多いから卑怯を教えましょう」は論理的でないから、国民に受けません。



しかし、いじめを本当に減らしたいなら、「大勢で一人をやっつけることは文句なしに卑怯である」ということを、叩き込まないといけない。たとえ、いじめている側の子供たちが清く正しく美しく、いじめられている側が性格のひん曲がった大嘘つきだったとしても、です。「そんな奴なら大勢で制裁していいじゃないか」というのは論理の話。「卑怯」というのはそういう論理を超越して、とにかく「駄目だから駄目だ」ということです。この世の中には、論理に乗らないが大切なことがある。それを徹底的に叩き込むしかありません。いじめをするような卑怯者は生きる価値すらない、ということをとことん叩き込むのです。（後略）

また、昭和女子大学理事長で評論家としても著名な坂東眞理子氏も「親の品格」という著書で、「いじめをしない子に育てる」という内容で次のように提言されています。

親はいじめが起きてから動き出すのではなく、その前に、自分の子どもに「弱いものをいじめるな」としっかり教えなければなりません。（中略）－

いじめは、自分では防ぎようがないというのが真実です。しかし、自分は誰もいじめないということは、自分で決心すればできることです。（中略）－



人をいじめるのはいかに人間として恥すべき行為か、ましてや弱いものを集団でいじめるなど人間の風上にもおけない、うそをついたり、だましたりするのと同じくらい卑劣なことだと、しっかり教えなければなりません。

いじめは「人としての品格を損なう行為」であり、「絶対許されない犯罪行為」でもあるということ、学校でも家庭でも子どもたちに強く指導していきたいものです。